

逝去された名誉会員等への追悼文

小町喜男先生の功績を偲んで

- 1927年11月5日 生まれ
- 1952年 大阪大学医学部卒業
- 1955年 大阪大学医学部公衆衛生学助手
- 1959年 大阪府立成人病センター勤務
- 1967年 大阪府立成人病センター集団検診第一課長
- 1975年 大阪府立成人病センター集団検診第一部長
- 1980年 筑波大学社会医学系教授
- 1982年 筑波大学老化特別プロジェクト長併任
- 1990年 筑波大学名誉教授
- 同年 大阪府立公衆衛生研究所長
- 1996年 大阪府立公衆衛生研究所名誉所長

日本公衆衛生学会名誉会員小町喜男先生が2020年6月10日逝去されました。先生は、大阪大学公衆衛生学関悌四郎教授の下より、1959年に大阪府立成人病センターに勤務されました。成人病の名称は厚生省が用いて間もなく、新たに挙がってきた3大死因(脳卒中、心疾患、がん)への取り組みの開始の時でした。大阪府立成人病センターを基盤として組織的に循環器疾患対策を開始しました。その当初は日本人に多発する脳卒中の原因解明も充分でなく、まして発症を予防するなど考えられないという意見が大勢でした。しかし文化国家で脳卒中死亡率が一番高いということは、逆に考えればそれを減らさうることだと思い、小町先生はこの仕事を始めました。ここで重視したことは地域住民の中に入り、仕事の大切さを話し合いながら、対策のための組織づくりをする一方、正確に健康度を測定する手技の開発、診断基準の標準化、さらに一般化を考えることであり、この仕事には多くの困難がありました。診断手技の開発、標準化、一般化を進めながら、健診で発見されたりリスク有所見者に対する生活指導を行うことを第一の課題とし、疫学調査に関することは第二の課題としました。これが50余年にわたって後継者に引き継がれて地域で仕事を継続できた原因でした。地域住民の健康対策を第一にした取り組みは1993年秋田県井川町名誉町民の表彰に示されています。さらに、1999年、公衆衛生を専門に行って来た者にとって最高の荣誉なことである保健文化賞を授与されました。疫学調査は第二の課題としながら、

研究成果は、日本人の脳卒中とくに脳出血の成因は欧米人の虚血性心疾患のそれとは大いに異なり、当時の質素な食生活と重労働によることを明らかにしてきました。すなわち、動脈硬化の原因は動物性脂肪の摂りすぎのために起こるといわれてきた中で、日本では都会より農村に脳卒中が多発することに着目し、現地に密着した疫学調査により本質を追求することを重視した研究を進めました。これにより、日本人の脳卒中多発の大きな要因は、動物性食品の摂取不足に基づく低コレステロール状態と塩分多量摂取による高血圧であることを解明しました。これは虚血性心疾患が多発する欧米の研究をもとに高コレステロールが原因と考えていた昭和40年代の医学的常識を覆すエポックとなりました。さらに、保健衛生行政においても、循環器疾患の予防管理活動の実績をもとに、地域の特性の把握の上に立って疾病の予防管理を行うことを国の審議会、委員会で提言を行い、国民健康づくり計画モデル事業が実施され、わが国の健康対策が推進されました。この上、予防対策の実践に従事する人材の教育研修に力を注ぎ、日本循環器管理研究協議会理事長の時に循環器疾患予防に携わる医師、保健師のセミナーを創始しました。本セミナーは32年を経て、なお発展をしています。学会における働きは、日本公衆衛生学会理事、日本脳卒中学会理事、第48回日本公衆衛生学会総会学会長、第1回日本疫学会学会長、日本循環器管理研究協議会理事長を務めました。また、国の審議会や委員会では、厚生省公衆衛生審議会委員(健康増進部会、老人保健部会)、厚生省昭和55年循環器疾患基礎調査委員会委員(解析小委員長)、厚生省地域保健将来構想検討委員会委員等、学会および行政施策両面に大きな足跡を残しています。これらの数々の業績を遂げたことについて小町先生自身の言葉で語ると、「先師関悌四郎先生のお勧めに従い公衆衛生に志して、先輩並びに一門の士に恵まれ、自由に研究や実践活動を行うことができました。さらには大阪、秋田、高知、茨城その他の地域、職域の方々の献身的なご協力があったからこそできた仕事であると思っています。」

公衆衛生を中心としての研究、教育、行政の広い領域における功績により、2001年11月 勲3等瑞宝章を受勲されました。

元 大分医科大学公衆衛生医学教授
小澤秀樹

篠崎英夫先生を悼んで



1943年10月5日 生まれ
 1969年 慶応義塾大学医学部卒業
 1977年 広島県公衆衛生課長
 1987年 静岡県衛生部長
 1994年 厚生省大臣官房厚生科学課長
 1996年 厚生省障害福祉部長
 1998年 厚生省科学技術審議官

1999年 厚生省保健医療局長
 2001年 厚生労働省健康局長
 2001年 厚生労働省医政局長
 2003年 国立保健医療科学院院長
 2009年 国立保健医療科学院名誉院長

私が昭和57年に厚生省入省時、最初に配属されたのが公衆衛生局地域保健課で、その時の課長補佐が篠崎先生でした。その後本年3月にご逝去されるまで約40年間、公私に亘りお世話になりました。医系技官としての最初の上司であったため、私にとって医系技官のロールモデルであり、メンターでもありました。

先生は慶応大学医学部の学生時代から公衆衛生分野の道を歩まれる志を抱かれ、公衆衛生修学生とされました。医学部卒業後、神奈川県に入職され、鎌倉保健所から公衆衛生行政官としてスタートされ、平成21年に国立保健医療科学院の院長を退官されるまで40余年間の長きに亘り公衆衛生行政官としてご活躍されました。この間、厚生省・厚生労働省本省のみならず、広島県に公衆衛生課長として、静岡県に衛生部長として出向され、さらにはWHO西太平洋地域事務局にも出向されました。

それぞれの勤務先で様々な法律や制度の改正に取り組まれ、多くの功績を残されていますが、先生の大きな影響を受け私の専門分野ともなった国際保健の分野における先生のご活躍について紹介させていただきます。

先生は医学生の時から将来、国際的な場で活躍したいというご希望をお持ちだったようです。厚生省入省後、英国マンチェスター大学に留学され、主に精神保健学を学ばれました。この留学を通じ、国際的に活躍したいという思いを一層強く持たれ、その後広島県出向中にWHO西太平洋地域事務局の精

神衛生課長への就任要請を受け、広島から直接マニラに赴任されました。故中嶋宏先生が日本人として初めてWHO西太平洋地域事務局長として選出され、マニラに着任される前でしたが、中嶋先生が着任後はその右腕として中嶋先生を支えられました。ところで先生の英語をお聞きなされた方は覚えているかもしれませんが、どこかインド人の訛りがありました(笑)。これはWHOに勤務時代、最も親しかった同僚のディロン氏というインド人職員がいて、先生は彼の英語から随分影響を受けたのだと冗談交じりに話しをされていました。

中嶋先生の信頼が厚く、先生ご自身もそのままWHO勤務を続けたいという希望があったようですが、ご尊父の病気のため帰国を決断され、厚生省に戻られました。その後のWHOでは中嶋先生の地域事務局長の再選挙そして本部事務局長選挙とその再選挙が5年毎に繰り返されましたが、先生は引き続き様々な形で中嶋先生を支えられました。一方、先生は2度にわたりWHOの執行理事を務められ、WHO西太平洋地域委員会の議長もされました。さらにWHO本部のHealth Research委員も歴任し、世界の医学研究分野のリーダーと共にWHOの研究分野の方向性に関する議論に参加されました。私もWHO執行理事会をはじめ、先生が出席された国際会議や海外出張に何度かお供をさせていただきましたが、「篠崎流外交術」から多くを学ばせていただきました。

こうした長年にわたるWHOを中心とした国際的な活動を通じて知己を得た、世界のリーダーとの親交もご逝去される直前まで続けられました。とりわけ中嶋先生の後任としてWHO西太平洋地域事務局長になられた韓国人のハン先生との交流は長く、お互いにソウルと東京を訪問し合い旧交を温めていらっしゃいました。そのハン先生は本年2月にご逝去され、その後を追うように先生がご逝去されたのも何かの因縁かと思わざるを得ません。

新型コロナウイルス流行の終息を見られぬままにご逝去されましたが、生粋の公衆衛生行政官として、また国際保健の草分けとして、厚生労働省やWHOの対応を病床から心配されていたのではないかと拝察します。ここに改めて先生のご功績とご遺徳を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

聖路加国際大学公衆衛生大学院教授
 遠藤弘良

久道茂先生を追悼して



1939年 1月3日 生まれ
 1963年 東北大学医学部卒業
 1972年 宮城県対がん協会検診センター長
 1981年 東北大学医学部教授
 1995年 東北大学大学院医学系研究科長・医学部長（2001年まで）

2002年 宮城県病院事業管理者兼宮城県立がんセンター総長

2007年 宮城県対がん協会会長

日本公衆衛生学会名誉会員 久道茂先生が2020年10月24日に逝去されました。生前のご厚情に深く感謝申し上げます、ご功績を偲び、追悼の文を捧げさせていただきます。

久道先生が東北大学医学部をご卒業後に入局された第3内科は当時、X線装置を載せた車を開発して宮城県内各地で胃がん検診を始めたばかりでした。先生も胃がん検診の発展に尽力され、33歳の若さで宮城県対がん協会検診センター長に就任されました。そこで、がん検診の普及・啓発から1次検診と精密検査の実施、データ管理までを一貫して行う「宮城方式」を確立し、それはがん検診のモデルとして全国に普及しました。また、検診の精度評価、がん検診の死亡率減少効果に関する疫学的評価などで数々の業績をあげられました。

これらの業績により1981年に東北大学医学部公衆衛生学講座の教授に抜擢されました。教授としての数々のご業績の中で最も特筆すべきは、1990年に宮城県コホート、1994年に大崎国保コホートという各5万人規模のプロジェクトを実現されたことです。このコホート創設・運営の経験が、東北メディカル・メガバンク機構の15万人コホートを可能にしたと言っても過言ではありません。

久道先生は、3期6年にわたって医学系研究科長・医学部長を務められ、大学院重点化を完成され

ました。その際、時代の動向に即した方向へ研究分野の再編を図り、任期中に36人の教授（定員の約3分の1）を選任するなど、本研究科の発展の基礎を作り上げられました。

2002年に定年退官された後は、宮城県病院事業管理者・宮城県立がんセンター総長を経て、2007年に古巣である宮城県対がん協会の会長に就任され、2020年6月に退任されるまで宮城県民のがん予防と公衆衛生の向上に尽くされました。

先生は、第45回日本公衆衛生学会（1986年）第4回日本疫学会（1993年）の会長、日本医学会副会長などを務められました。さらに文部省医学・歯学委員、厚生労働省厚生科学審議会会長などを歴任されて、国の文教行政や厚生行政にも多大な貢献をされました。

以上のご功績により、日本癌学会会長與又郎賞、朝日がん大賞など、数々の賞を受けられましたが、ご本人にとって最も嬉しかった賞は、生まれ故郷である宮城県涌谷町の名誉町民に推戴されたことではなかったでしょうか。

このように書くと、とても偉くて堅苦しい感じがしますけれども、久道先生は肩書きを感じさせないユーモラスな発言で場を和ませる方でした。何よりも、気配りの方でした。先生とご一緒させていただくと、なんとも言えない安心感に包まれるのです。先生は褒めて育てることが上手で、私たち門下生の個性を伸ばすことを楽しんでおられたようです。また先生は、「茂堂 久（もどう・ひさし）」というペンネームで小説を6冊も書かれました。現代医学とサスペンスを絡ませたストーリーにはファンも多く、この度、東北大学生協医学部店は「茂堂久先生追悼コーナー」を設置してくれました。

先生は私たちに、研究者や教育者としてのあるべき姿、そして「おどか」な生き方について、身を以て教えてくださいました。先生から賜った数々の学恩に改めて感謝申し上げます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野教授
 辻 一郎